

## 一週間の劍橋ケンブリッジ大学寄宿舎生活

長岡半太郎

昨年七月ブリュッセルで開かるる万国學術研究会議に出席せよとの命令を受け、五月三十一日に横浜を発し、米国を経て六月廿六日パリに入り、一週間滞在の後ブリュッセルに行き、會議に参列した。各種の科学を代表した学者連が八十名許りほかも列席して、大分賑かな会合ではあつたが、何となく大学教授会に似て、議論もややそれに類似していた。只学生の動作に関する話が全く抜きにせられた氣持ちがした。

この會議は大戦(第一次世界大戦。一九一四—一九一八年)の際、敵国を屈服せしむる為に設けられたのであつて、名は国際とか万国とか申す形容詞を冠せられても、実は中欧諸国を除外した会合である。然るに平和が締結されてより茲ここに七年を経過しているから、国境無き学問の進歩を図るには、ドイツその他の諸国を加入せしむるが至当であると、誰も感じそうなものであるが、ベルギー、フランスの如き最も敵弾を浴びし国の学者は、會議の目的に背くと固く執つて動かず、蛮的な戦争を挑発した国の学者は、仲間入りせしむること全然不可なりと痛切に論議し、遂に復有名無実の万国會議として、依前旧規に遵したがうことになつた。つまりかくの如き議論を吐く学者の論拠には、感情と申す人心を支配するものが脳裏にわだかまつてゐることは明白である。誠に予の如きものが、學問に国境無しの説を為せば、それはドイツの四十サンチ(サンチメートル、センチメートルのフランス語読み。主に火砲の口径に使う)爆弾の辛味を知らないからだと嘲る口舌によつて明瞭である。果してその厄に逢わなかつたオランダ、スウェーデン、デンマーク、ア

メリカ等の学者は、東欧諸国の加入を望みしに鑑<sup>かん</sup>がみて判る次第である。予は感情に趨<sup>ほ</sup>るは学者の持ち前、三杯酢の酸っぱいのも同様だと思ひ、ベルギーの都を去つてケンブリッジに向つた。

同じ研究会議の一部に属する万国天文学会が、七月十四日からケンブリッジで開かれる豫定であつた。ロンドンを経て之に列席することとした、之に就て前触れがあつた。ケンブリッジは大学町であるから宿屋が少い。それ故大学の寄宿舎に、会期間寝宿りをしてはどうかとの意味である。是は丁度予の意に適つた訳で、ブリュッセルから電報で寄宿舎の一室を借り度いと申込んだ。ロンドンから麦の穂の黄ばみたる畑や、牧場で暑さを凌ぐため牛馬が小川の傍の楊柳の影に憩える单调な景色を眺めつつ、二時間計り<sup>ばか</sup>でケンブリッジに着いた。直に会議の事務所<sup>事務所</sup>に就て寄宿舎の何校所属のものなるかを尋ぬれば、セント・ジョンズ・カレッジ(St. John's college)のH号と定めてあることを知らせてくれた。

×

×

ここは恩師菊池大麓<sup>(一八五五—一九一七年。ケンブリッジ大  
学に留学、明治大正期の指導的数学者)</sup>先生が学ばれた大学であれば縁故も深し、学生の生活状態は話<sup>話</sup>に聞いているが、実際に就て見るも一興だと思ひ、自動車<sup>自動車</sup>を駆つてセント・ジョンズの門に着いた。門は中世紀の歴史に示さるる高い塔が屹立して、その中間を廊下で連らね、其下を通行口にしてある。夜は大なる扉を閉ざし、右側に門番を呼び起すベルの取手が設けてある。塔の両側には二階造りの煉瓦屋がある。門番はシルク・ハットに黒装束で行人人を監視している。自動車を止めて荷物を下さんとすると、イヤ久し振りですぬーと言いつつ握手を求める人がある。麦藁帽子の鳶色になつたのを冠り、汚れ襟とシャツを着けて、さも辻乞食の様である。はてさて是は何人ぞと驚いている内に、君は忘れたか、僕はキャンベルだよと笑いなから自ら名乗られたので初めて気が付き、あの国立物理研究所のキャンベル君ですかと問えば、そうだよ、今は

陰退して、ケンブリッジに自分の小研究所を作るつもりだ、君の来ることは知っていたが、偶然門前で邂逅するのは物怪もつけな幸、ときに寄宿寮は何号だと問われて、事務所でもらった札を示せば、僕案内してやると、中庭を左に行き、二階下の一角H号に入った。

薄暗い二十畳敷位の部屋の中央にテーブルがあり、その四辺に椅子がある。側にはソファが備えられて、二つの窓の下には各卓があつて、文房具が整っている。一方の壁にはストーブがあり、他方には書棚があつた。書籍は文学的、経済的のものが見えたが、その所有主たる学生は帰省していた。その側に戸がある、開ければベッドがある、洗面器がある、筆筒たんすがある、ラケットが二つ三つ懸けてある、その下にスポーツに用いる諸種の靴が列を為していた。向う側の戸を開ければ、小台所があり、ガス爐のみか、銀製のサジ、フォーク、茶わん、皿杯皆備つていて、小さな家庭のように思われた。暫しばらくすると古風な広いボンネットを冠り、靴までおわれた長スカートをはいた老女が来て、部屋を見まわつて出て往つた。

予は思わず、あの女は何者だとキャンベル君に問えば、あれは世話やき婆あさんだ、一日に四度位来るから何か用があれば彼に頼み給えと言う。そこで合点したが、予が四十年前、帝大の寄宿舎に居た時の事を思い出せば、東西雲泥の差があつて何だか迷宮に入った心地がして、判らぬこと計ばかり、旅の恥はかき捨てと、昔から言うけれども、まずいことをして、隣近所の塾生に覚られ、日本人があんなしくじりをしたと、笑話の種を作つては困ると思ひ、キャンベル君に万事聞き糺ただして置いたから、大失敗は無かつたつもりだが、外国の風俗異つた所では、失敗で無いと思つても、時には失敗であるから、断言はできない。

やがて赤帽（駅で乗客の手荷物を運ぶボータイ。赤い帽子をかぶっていた）ならぬシルク・ハットは、荷物を部屋に運んでくれた。話も大分進行して落ち付いた心持ちがすると、キャンベル君はノット（Cargill, Clifton, Knott 一八五六—一九二二。イギリスの物理学者。一八八三年来日し東京大学で電気学、音響学、磁気力学などを教えた。）先生

が亡くなって気の毒だったよ、君も日本でノット先生に教わったそうだね、好々爺だったが、遂に世を去られた、悼むべしであると言われて、涙の落つるのを知らなかった。世界は広くて狭いと知っているが、キャンベル君がアイルランド生れであるに係わらず、予と同じくノット先生に就て学んだことも、珍らしき因縁である。部屋の窓から中庭の向うに古色蒼然として高く聳ゆるチャペルの塔を眺めながら、寄宿舎の事をキャンベル君と問答し、迷宮の勝手があられました判ると、キャンベル君は是から校内を案内しようと、中庭を横ぎり食堂に導いた。古きゴチック建ての高い天井の下に、食卓が陳列されてある。その上壇には又食卓がある。ここが教授のテーブルだと教えられた。

学生食堂の壁に、油画が沢山懸けてある。是等はセント・ジョンズを出た有名な人の像で、学生の模範となるべき歴々である。湖水詩人の一人であるワーズワースの両側に、天文学者ジョン・ハーシェル、海王星の発見を以て有名なるアダムス(John Couch Adams 一八一九—一八九二。イギリスの数学者、天文学者)の青年時代の像がある。数学者シルヴェスターの肖像が向う壁にかけてある。博言学者(言語学者)パーマーが、アラビヤ服を着て之と相對している。その他著名な人の像が二十計ぼかり列を為している。そこで予は不審を起したのは、セント・ジョンズ・カレッジで永く教鞭を執っていて、良教科書を編纂したので、日本でも予等はその恩恵に浴していたトドハント(Isaac Todhunter 一八二〇—一八八四。数学の教科書を多数執筆。日本では明治期に長沢亀之助によって多数翻譯された)先生の像は何処にありますかと問えば、あの人はもう亡くなった、オリジナリティーの少かった人だからその名も既に亡びた、ここにかけらるる名誉を荷わないことは当然だよと言われて、ケンブリッジ大学の数学試験に難解の問題を出し、短時間に解答を求めて、随分学生を悩まし、頗すしおる弊害を残した習慣も、今は既に下火となって独創的研究に重きを措くようになった事実が判明した。実に賀すべきことである。

食堂から奥庭に向い二階に上れば談話室がある。化学者リヴェイングの省像が懸けてある。椅子、テーブル、贅沢なものが集めてある。是から先きは図書室で、本棚が列を為している。右に折るれば寄宿舎がある。庭を囲んで皆寮である。その一角には現今ケンブリッジ大学物理学の重鎮であるサー・ジョセフ・ラーモア (Joseph Larmor, 一八五七—一九四二。アイルラ) が二室を占めている。前に記したトドハンターは図書室に隣する室に住んでいたそうである。その後隣に寄宿していたエジンバラ天文台長サン普森 (Ralph Allen Sampson, 一八六六—一九三九。木星の四大衛星の理論で有名) を訪問したとき、長岡君、君はトドハンターの教科書を読んだことは無いかと問われた。いやその先生の跡は如何になつたか知り度いのです。教科書の恩恵には浴しました、又難解の問題に頭痛を催した事も数知れませぬと答えたところが、この戸の上に学生の名が書いてある。その下に模糊としてアイザック・トドハンターの字が見える。ここに居たのだよ、今や教科書も新まり、この名も次回の塗り替えに、憐れ一抹のペンキの下に葬られんとしている、悼ましいことだ。教科書で名を残すような浅い了簡では駄目だよ、之に引き代えアダムスの功績は赫々たるものだ、今度天文学会に集つた世界の名士にたれ一人知らぬものはあるまいが、トドハンターを知るもの幾何ぞと、撫然として晒つたのは面白い。

キャンベル君に導かれて奥庭を出れば、柳陰深く洒々たる草叢の間を流るるカム川に架した橋を見た。この橋は歎息橋ブリッジ・オブ・サイスと云つて、ここの名所であると申した。そこで予は不審に堪えず、この閑雅な境に歎息する厭世者を出すとは、恐らく試験に落第した学生が橋上から川の流れを見て卒業するものをうらやみ、逝くものはかくの如し『論語』字宰第九。子在川上。逝者如斯夫。不舍晝夜。と歎息する意味かと、キャンベル君に問えば、それは思いも寄らぬ考えだ、ヴェニスのリアルトにある橋をモデルにしてこしらえたので、名まで同じじゃないかと言われて、自分の揣摩ま(あて推量)した事が丸切り嘘であつたことを耻じた。



セント・ジョンズ・カレッジを背景とするカム川の風趣

セント・ジョンズ・カレッジの裏門を出で、楡の老樹の並木の間を歩み、隣のトリニティー・カレッジに入った。ここに長い廊下がある。ニュートンが嘗て音の速度を測定するに利用したそうである。その他ニュートンの古跡は沢山ある。その住んでいた部屋も現存している。ニュートンは数学物理学等においては、前に古人無く後に来者無しであるけれども、すこぶる常識の欠けた人であった。トリニティー校に住居しているとき、猫を飼っていた。その猫が子を生んだ。親猫の出入りする穴は穿けてあつたが、子猫が生れたからとて、傍に又小さな穴を穿けたそうである。幾何学の大家の常識は是で判断される。その他しくじり話は多くあるけれども、餘り馬鹿げていて記すも如何<sup>いか</sup>わしい。

現今は前世紀から今世紀の初めに雷名を轟かした物理学者サー・ジョセフ・トムソン (Sir Joseph John Thomson 一八五六一—一九四〇。しばしばJ.) が住んでいる。先生の額は学生の食堂に懸けてある。多数の名士の内に独り緋の衣を着ているのが何だか変であつたら、キャンベル君に問えば、是は近年授与せらるる学位服だ。君も数日内には着なければなるまいよという。妙な事をぬかすなと思つたけれども、笑談だと思ひ氣に止めなかつた。

かく巡回している内に、既に正午過ぎになつたから、大急ぎでロード・ケルビン (ケルビン卿。本名ウィリアム・トムソン (William Thomson)、一八四二—一九〇七) の学んだピーター・ハウスに行つた。如何にも貧弱な建物で、チャペルも名許<sup>ばか</sup>りである。然し面白いことには

電燈の發明あつて間も無く、ケルビンが寄附した設備を見た。なる程今から見ると旧式で、スイッチなどの奇怪なること、歴史的に攻究すれば興味多大である。そこで何故にこの校だけかく貧弱なるかをキャンベル君に問うた処が、この校はスコットランド生れの人が来るところで、純イギリス人と別になっている。ここにマックスウエルやテイトもいたそうである。同じブリテイッシュであつても、その間に幾らかの閥があつて、ケルビンもその理由でここに寄宿したそうである。唯マックスウエルはその後何かの事情で、トリニティーに移つたそうだが、ニュートン後の大学者としてトリニティーでは誇りとしている。是でケルビンがケンブリッジに教授とならざりし事も推量できる。又マックスウエルがトリニティーに居なかつたならば、恐らくキャンベンデイッシュ実験場の建設に与らなかつたらうと察せらるる。同国人でもこんな懸隔があるところを見れば、異国人に対して如何であろう。況や東洋人いわんにおいてをやと言わざるを得ない。印度インドから来た留学生が、排英熱(当時インドは英國の植民地であり、そのためインド国内に反植民地の機運が盛り上がっていた)に浮かさるるも想い当ることがむずかしくない。

×

×

キャンベル君に再会を約してセント・ジョンズ校に帰り、直に食堂に入れば、七八人上壇の教授席に控えている。ゼーマン効果の発見を以て世界に名を知られたるゼーマン(Pieter Zeeman 一八六五—一九四三、オランダの物理学者)教授は、十五年振りであつた。ごま塩の髪も全く白くなつて、最早老境に入らんとしているが、相変らず談笑して厭味の無い顔付をしている。眼光人を射つて隙の無い風采を示している、フェリエ將軍は、大戦に無線電信に関する応用改善を以て斯界の巨頭として知られているが、近頃感光電池の利用を思い付き、その効能を吹聴している。天文学の大問題である三体運動の攻究を機械的に終了したストロームグレンは、軌道の複雑な状況を話している。ヘルツシュユプリング(Einar Hertzsprung 一八七三—一九六七、デンマークの天文学者。恒星のスペクトル型を横軸、絶対光度を縦軸にとつた統計図は、H・N・ラッセルの名と合わせてヘルツシュユプリング・ラッセル図として知られている)は南亞に旅行し

て変光星の観測を為した実験談を試みている。サンプソンは時辰儀(メクロノメーター)と無線電信で経度を測定する方法を論ずる。ジングルは予とスペクトル研究の方法結果等を談じていたが、卓の一方に席を占めているラーモア教授の談話に会衆の注意は払われた。『エーテルと物質("Ether and Matter", 1900)』と題する教授の著書は、物理学者が独創的著述として、今世紀の始めに持てはやされたものである。門番の話によれば四十餘年寄宿舎に寄寓して、生涯をこの校で過ごすつもりであろう。今日では全く校の活歴史であるとのことである。教授に置かけた質問は、四壁にかけた名士その他の省像の由来である。最も珍らしきは、正面に在る婦人の像である。中世紀を距ること遠からざる装束で、学校には縁もゆかりも無さそうな風勢を示している。然ししかはヘンリー七世の母マーガレットで、本校の創立者であつた。一五一一年礎石を置き、その後修理増築を為して幾分變つたそうである。仰いでゴシックの高天井を見れば、燻つた上が黒く光つて、古き百姓家の煤竹すすたけも及ばぬ程である。入口の階段は磨り減らされて、古砥石の形になっている。その四百餘年を経過したことは建築の何かにつきて容易にうかがわれる。

話しつつ食い、食いつつ話す内、関東大地震の弔慰の言葉に大分興を催おしたが、かかる名士と相並んで食事するは、学究者の為には実に愉快に感じた。そののみか食器は古雅な銀製のものが多く用いられ、料理も一等ホテルのそれを凌ぐかと味われた。晚餐には学生も多人数見えたが、頗る贅沢な料理を食い、良い食器を用いている。終れば長老の一人ラテン語で祈祷を為し、了おわつて談話室に入り、和氣あいあいたる間に意見を交換し、あるいは気焰を吐き、煙草の煙が室に満つる頃散会するを常とした。

×

×

七月十四日午後三時天文学会の開会式を行う豫定であつた。式場は時間前に会衆を以て満たされた。第一



に登壇したのは大学總長バルフォア卿であつた。通常服の上に緋の衣を着けた様子はあたか恰も僧正でもあるかと思われた。氏は世界に名を知られた政治家であれば、落ち付きはらつて、天文学におけるラジエーションの研究の必要を説き、懸河の辯(勢いよくよどみのない弁舌)をふるつた。専門家にあらざる人がほとんど専門家を凌ぐ議論を吐き、一々急所を捉えて微細な点まで説破したのに、会員は耳を傾け、皆大英国の政治家が科学の蘊奥うんおうをきわめているに驚いた。次にアストロノマー・ローヤル(王立天文台長)なるダイソンと、学士院幹事であるジーンズが歓迎の辞を述べた。

式後会衆はダウニング・カレッジの庭園に開かれた園遊会に臨んだ。ケンブリッジ大学に関係ある人々は大概来たが、中にはニュートンの衣鉢を伝えたトムソンも見えた。広い額に、一度見れば忘れられない皺を寄せ、大言を発して談話する状況は、ニュートン再生と思われた。その他各専門に属する著名な人もあつたが、独り緋の衣を着て幹旋したのは副總長セワードであることを知つた。この会は各国から集まつた科学者の親睦を図る為になされたのであつたが、学者が寄ると兎角議論に花が咲き易い。予も思わずその渦中に入つた。同位元素の研究を以て有名なるアストンと、水銀を変じて金と為す(長岡は水銀の原子核から陽子を一個取り除いて金にする事ができる実験に成功したと誤まつて思つていた)ことに付き、意見の相違があつて、大分長く論辯を重ねた。その時ちよつと驚いたことは、この研究者が力学の素養すこぶる不完全で、数学的問題に立ち入ると一向判らぬ顔をする。餘り不審で、ある人に尋ねれば、アストンはケンブリッジ大学で学ばず、独学でここまでこぎ付けたのであるから、他の学者と標準を異にして、話をせねばならぬと注意された。この大学には何やら閥があるようで、また大まかなところがある、これがほんの英国式であろう。

晩は諸校の校友会に招かれた。セント・ジョーンズ校では御客を図書室に案内した。パーチメント(羊皮紙)に書いた古書や、大切なドキュメントがあつたけれども、科学一方のものには、いわゆる猫に小判で、批判することは不可能である。しかし之等の文書を読んで見ると、英語の綴り方が幾度か変遷して現今のスペリングになつたかを窺われる。無論時勢の推移によることであろうが段々簡単になつてゐる。ゆくゆく日本語もローマ字になるであろうと豫想すれば、ヘボン式(来日したJames Curtis Hepburnが創始したローマ字)や日本式などは同じ連命に逢つて、最終には如何なる綴り方になるであろうか豫測はできぬが、矢張り簡便を主意とすることは、国の東西を問わぬことと思はるる。

今度の学会に参列した人の最大の注意をひいたのは、アダムスの日記であつた。彼がセント・ジョーンズに学生であつた頃書いたもので、その内の数行に過ぎぬが、天王星の運動に不規則な状況があるにより、若しこの星より遠い惑星があつて、この狂いを生ずるものとすれば、その軌道と位置質量等は幾ばくであろうか、計算して見ようと思うとの意味を書き記したもので、その後材料を集め、推算に着手した。遂にその位置を定めて、グリニッジ天文台に報告したが、同時にフランスでも同様な仕事を為したルヴェリエの通知により、ドイツの天文台(ベルリン天文台でガレ Johann Gottfried Galleが一八四六年九月三日に発見した)で海王星は発見された。まだ人間の見たことのない星を、計算上豫言した功績は没すべからざるもので、兩人共発見の名誉を荷つた。この由緒あるドキュメントを目前に突き出されては予の如き鈍才も又感奮せざるを得なかつた。

ある晩シドネー・サセックス校に招かれた。芝生の周りに数百の電燈を飾つて、夏の夜の涼しき風に吹かれ、楽しかつた。そののみか、諸国の楽を奏して集會を賑かにした。この校は昔クロムウエルが学んだところであるから、さぞ殺伐な空気に満ちてゐるであろうと思つたが、豫想に反してゐた。クロムウエルの遺物でもある

かと尋ねたが、何にも見ることを得なかった。憶うにこの一代の英雄は、武力を以て議院を閉鎖する位の意気があったから、学生時代にはブルドッグに追跡されたことであろう。ブルドッグとは何であるか次に説明する。

晩餐後セント・ジョンズの談話室で、フェリエ將軍と感光電池の利用を話していると、容貌魁偉なる人が来て、いきなり手を握り、君は長岡だろう。この間受取ったスペクトル線の論文はモニメンタルだか、アメリカの新聞記者に対する君の換金の話は全く法螺ほらだろう。許かして置けないぞ。事実白状しろ。おれはカナダのマクレナンだと、無遠慮に突きかかつて来た。そこで豫かねて御名前は承っているから、論文の交換はやっているが、御目にかかるは初めてです。君はセント・ジョンズにいたのか、それともトリニティーか、トムソンの下に仕事をしたことは隠れなき事実である、ケンブリッジ大学の裏表とも話したまえと迫ると、この男中々剛情で、前の問から返事しろと言うので、換金の方法を精しく説明して納得せしめた後、彼の学生時代の話を聞くことができた。マクレナンは遙々カナダから遊学して、トムソンに就て研究したが、豪放な性質で、夜遊びが大好きであつたそうだが、学生監督、即ちブルドッグの捕虜となつて帰宿した度数重なつて、外出毎に、行き先きと帰宿時間とを届け出なければならぬ破目に陥つた。遂にかような窮屈な小天地に生活するは不可能だと思ひ、中途退学を決心したそうである。今はカナダの科学界の大立者で、研究もやり、事務も扱う手腕家である。この人と話せば話すほど、その快活な性質を發揮して、興味深かつた。その話にケンブリッジ大学では、学生の行動を監視するに寄宿舎のみに限らず、町の隅々みまで詮索し、殊に夜更けて巡視を放ち、学生の挙動を逐一報告せしめ、場合によりては途中之を唯何ママ(誰何か?)し、引捕えて連れ帰ることもあるそうで、ブルドッグの渾名あだなはその職掌を語つて餘りあることを感じた。その後復マクレナンに逢いたく、その宿を探したが、現今既に老いても、青年時代の小天地に安んじなかつたか、会期中にケンブリッジを去つて雲隠れしてしまつた。

劍橋ケンブリッジ大学を構成している二十計ばかりの校舎の大概はチャペルを有っている。中にも一四四六年に礎を置いたキングス・カレッジのチャペルが最も莊嚴で寺院式に築かれている。予が寄宿していたセント・ジョンズ校のチャペルは中位のものであったが、長さは百七十二呎フット、内幅三十四呎フット あった。

学生はもと祈祷に必ず行かなければならなかったそうだが、近年は随意となつた、朝鮮人のような白い上衣を着て出入りしているのを、宿舍の窓から時々覗いていたから、一度内部を見度たいと思つた。然しかし生来礼式には無頓着であれば、必ず失敗するからと心配に堪えず、校僕に案内してもらつた。

入口の正面には世界大戦(第一)で戦死した本校出身者の名を石に彫刻してある。右に折るれば礼拝堂がある。真正面が神壇である。その床は美麗なモザイクにできている。その一段にアダムスの海王星発見を記念する画がちりばめてある。両側の窓は皆ステンド・グラスをはめ、之を透過して来る光で礼拝堂を見れば如何にも奥ゆかしい。窓の一つにセント・ジョンズ出の有名なる人を記念してある。前に記した詩人ワーズワース、博言学者パーマー、天文学者ハーシエル、アダムス等を寄せ画として学生の将来における事業に範を垂れていることは、校舎の一部として記す価値がある。

校僕を帰して礼拝堂を見廻つてみると、夫婦連れの見物人が劍橋ケンブリッジ案内者に導かれて来た。何のいわれもなく、この夫婦が予をさしまねくから、近寄ると、案内者に聞えぬように小声で、面白いことを話してやると言うから、よく聞けば、案内者はこの堂はキリストの弟子であるジョン(ネ)が学問した遺跡であると、真面目で説明したが奇怪じゃないかと笑つた。予はその時何処の案内者もこんな嘘を話す。鎌倉八幡では頼朝公十三歳のときの頭蓋骨と呼ぶるものがあるが、之と好一对だと腹の中でおかしく感じた。

ある晩ラーモア、ゼーマン等に誘われて隣校トリニティーのチャペルに往つて音楽を聴いた。トリニティー

は英国著名の学者、政治家、文豪等を出しているから、チャペルの記念像などは他校の及ぶところでない。入口のホールにその最大人物と考えらるる人の像がある。第一に哲学者、政治家であったフランシス・ベーコンの大理石像がある。次はニュートン、その次はバーローである。このバーローと申す人は餘り名を知られていないが、ニュートンの先生として尊崇されている。その名は驢尾きびに付して伝わりと言うより、寧ろ驢頭むしに付して伝わった方である。その横に三十二呎フィートのオルガン・パイプが連立している。入つて右側に哲学者ヒュエルと、文豪兼政治家マコーレーの像がある。之に対して詩人テニソンが大理石にきざまれてある。

そこで予が不審を喚び起したのは、マックスウェルの像の建てられないことである。古今を通じ世界第一の物理学者と近頃賞讃せらるるマックスウェルの像は何処にありますかと、ラーモアに質問したところが、先生いわく、あの人はスコットランド生れであつた。話の好く判らぬ人で、劍橋ケンブリッジで名を知っているのは物理関係のもの計りだ。そんなことで何やかや六ヶ敷むっかし敷いことがあると話されたが、予が前に言つた通り、矢張り閥わがあることは疑い無い。しかし一世紀を経過すれば、マックスウェルの名は必ずニュートンといずれが大なるかを問われるようになるから、暫く待たなければなるまい。

電磁方程式を演繹するは力学方程式を演繹するといずれが困難なるやを訪ぬれば、この問題も自ら解決するわけで、その内学者が判断を下す時節が到来するから別に急ぐ必要はない。近頃の電気事業の發展は、概してその功勞をフアラディとマックスウェルに帰せねばならぬ。しかしてその数量的の事項に対しては、全くマックスウェルの指揮の下に働いているのである。殊に無線通信の如きも、マックスウェルは先覚者であつたことを思えば、トリニティーに区々たる大理石像を建ててぬの問題は、齒牙にかくるに足らぬ。くだらぬ質問を發したと話を他に転じた。

音楽は実に端嚴であつた。ラテン語で綴つた宗教的の歌に対するものであるから、自然莊肅な音を発する。三十二<sup>フイート</sup>呎のオルガン・パイプを吹奏すれば、礼拝堂のオークの棟は振動して堂も亦之に共鳴するように覺えた。

×

×

七月十八日付で二十一日午後五名の名譽学位授与を行うから式に出頭しろと手紙を受取つた。何だか藪から杵を出したような通知で当惑したが、前にキャンベルの笑談と思つたのが、事実となつて現れたのかと察せられた。キャベンディッシュ実験場を見物に行き、ラザフォード教授に逢い始めて考えた通りであることを確かめた。翌日緋の衣を届けてもらった。着てみると、衣のようであるけれども、胸に二條のひもが下つて、羽織の紐のようである。結ぶのやら一向知らず、又帽子は、ヘンリー八世の像に描かれてあるような、ビロード製のものである。前か後か知らぬが、金線の紐が下っている。寢室の鏡の前に立ちて思案にくれても、解決六<sup>むっか</sup>ヶしいので、遂に仕立屋に飛び込み、着方を聞きて、始めて胸の紐は結ばぬこと、帽子の金の紐は前に下げることを知つた。

式日になつてラーモアは、君には勝手が分るまいから、僕が案内するとの親切な辞に甘えて、連れられてダウニング校の副總長の午餐会に列した。セント・ジョンズ校から宴会会場まで十町(約一キロメートル)計りの間、緋の衣を小脇にはさんで、ビロードのボンネットを冠つて行つたが、この帽子を冠るは何だかきまりが悪く、途中女小供に笑われはせぬかと心配したけれども、皆見慣れていると見えてふり返るものもなかつたのは、何よりの幸いであつた。会場で衣を着て着席したが、学位を受くる人の年長者はパリ天文台長バイヨール(七十八歳)で元リツク天文台長であつたキャンベル、ライデン天文台長ド・ジッター、エール天文台長シュレジンガーと

予とであることが判った。皆天文学者であつて、予独り異分子であつたけれども、副總長が渡した引導で、趣旨は明白になつた。つまり各自の研究の主なるものを挙げて授与の理由と爲したのである。

会食後故道をたどりて、トリニティー校側の議事堂に出た。その間緋の衣を着て往来を歩んだが、夏の日の熱さに汗は流るる、前にボンネット丈では振り向かなかつた子供等も、緋の衣をびらつかせていると、妙な顔をする。更に流汗を催した。

議事堂裏の記録所で署名してから、陣立てを整えた。真つ先に立つのは槍持ちであつた。穗さきの下には、まさかりが付いている。槍持ちの装束は、十四五世紀頃流行の服をそっくりそのまま、ボンネット式の帽を冠り、ズボンに股でふくれて、膝から下は脚半きゃはん様のものを着けていた。此の如き服装は、ただに劇場で見るところを得るのみと思つていたに相違し、劍橋ケンブリッジでは今猶なほ実行しているに驚かざるを得ない。又やり持ちの風を見れば Shakespeare (やり振り) などいふ姓を名乗る人あるも無理ならぬことと思われた。やり持ちの後に副總長、校長等が、学位を授与せらるる五人を導き、會議堂に徐々と入り、副總長は上段に席を占めた。その後銀飾りの大棒を杖にした、従僕らしきものが控えていた。横に立てるはドクトル・グローヴァーという博言学者で、予が座席に就くや、ラテン語で演説を始めた。それが済むと又学位を受くるものの功績をラテン語で報告し、キャンベル、バイヨー等五人は、順次棒持ちに護衛されて、副總長の前に行き、黙礼して握手し、簡単なる副總長のラテン語のあいさつを聞き、その後に着席した。

是にて一部の式は終つたが、その日は大学卒業生にも学位授与式があつた。是等の卒業生は、黒い衣を着ていた。副總長の前に行き、膝を折つて握手した。この式が済むと、会衆は拍手して式を終えた。堂を出ずれば、賀詞を述ぶるもの多人数あつたが、その一人は、予に向い、君はこの劍橋ケンブリッジの儀式を指して、野蠻と言う

だろうと問うた。否、保守的であると答えた。それから皆集つて写真をとつて散会した。この日議事堂の柵外は、見物人を以て埋まり、盛会であつたが、先年東宮（昭和天皇の皇太子時代）殿下が学位（一九二二年五月一九日、ケンブリッジ大）を受けたまゝいしときも、グローヴァーがラテン語の演説をしたと話したが、その時はさぞ人山を築いたことであろうと推察する。

×

×

その晩トリニティー校で祝宴を開くからと案内があつた。天文学会に列席した平山（平山信？）、松隈（松隈健彦、一八九〇—一九五〇）天体力学専攻（東北帝国大学天文学教室創設者）諸氏と之に臨んだが、予は矢張り緋の衣で出た。トムソンは校長として、上段の長いテーブルの一角に席を占めた。不相変（あいかわらず）緋の衣を着ていたが、その椅子の背部の高いのに驚いた。嘗て（かつ）ニュートンの省像を見て、椅子の丈高いに気が付いたが、全くそれと同じ造りであつた。名誉学位を受けたものは皆このテーブルを囲んで座つた。固（もと）より三十人位すわられるテーブルであるから、その間には劍橋出（ケンブリッジ）の諸学者が挟まれていた。この大広間の真向うには、ヘンリー八世の省像が懸けられ、その左にニュートンの立像が画かれ、右にはレイノルズの画いた貴族の小児の像があつた。ニュートンの像をよくよく見ると、東大物理教室で、年々開くニュートン祭に掲げらるる省像は、この像の胸以上を模写したものである。その他詩人バイロン、テニソン、哲学者ベーコン等の像がある。壁には哲学者ヒュエル、小説家サッカレー、物理学者マックスウエル、トムソン、天文学者エアリー、数学者ケーラー、人類学者ゴルトン、その他著名なる人物数十名の額がかかつている。是等は皆トリニティー出身で、その沢山人材を輩出したことは、この校に及ぶものがあるまい。トムソンは天文学会員に向つて百五十年來アストロノマー・ロイヤルは、本校出身独占だと話したが事実であろう。祝宴が開かれると、トムソンは立つてラテン語で最初祈禱を為した、又ガレリー（廊）にいた楽師は、ラテ



ン語の歌をほとんど中断なくうたった。その中には十三四の子供もいたが、全く婦人無しの宴会はすこぶる奇親であつた。食事中アルコール分の強いビール、即ちエール(貯蔵熟成し  
ないビール)の廻し飲みが始まつた。盃は銀製の大型のもので、一升(約一・八  
リットル)位の容量があつた。その周りにまわナプキンの鉢巻がしてある。飲んで口を付けた場所を拭いて、次へ渡す為である。一人が飲んでいる間に、その隣の人は立っている。しかして盃はその人に渡さず、向う向うと渡す。この奇怪な習慣が何の為であるか、さつぱり判らず、隣席の元国立物理実験場であつたグレースブルックに尋ねて、その古式であることを知つた。

昔しサクソン王がエールを飲んでるとき、刺客の為に刺されて死んだことがあるそうで、以来立ち飲みをするときは、護衛の為め隣の人立つて注意する習慣になつてゐる。それが今もつて消滅せぬ。例えば君の着ている緋衣も中世紀の僧服から来たもので、僕の着ている黒衣の如きは、元は長袖に一メートル位の袋が付いていたものだ。是は托鉢たくはつに出てもらつたパンを容れる為であつた。緋衣は近年出来た学位服であるから、餘程簡単になつてゐると申されたが、英国の保守主義は通りものであつても、文化の中心にこれ程まで保存せらるゝとは思ひも寄らない。然し物理学方面では新研究が続々発表せられて、最新の空気を吸うことが可能である。實際ケンブリッジ劍橋のキャヴェンディッシュ実験場で為された放射能作の研究は、世界の学者に尊重せられて、科学上新時期を区劃することがある。かくの如く旧新入り混つてゐるから、古式ばかり墨守してゐるとは言い難い。宴会後庭を取り囲んでゐる廊下で会衆はカフェを飲みつつ談話を交えた。英国各地方の学者のみならず、東洋方面からまで来ているから、あだかもコスモポリタンの趣味を帯びた、中にもトリニティ出身の学者が多数あつて、しかも有名な人が沢山いた。ニュートン以来濟々多士、実にうらやましく思われたが、日本においては東大が之に均ひとしくなることを希望する。

×  
ケンブリッジ ×

学会で、専ら数学物理天文に関する劍橋ケンブリッジフィロソフィカル・ソサエティというものがある。滞在中この会が開かれたが相変らずコスモポリタン式の会合で、立錫の餘地無きまで聴衆を以て満たされた。印度人は多数見えたが、中華民国天文学者張雲（一八九七—一九五八。一九二九年中山大学天文台設立。変光星の研究に従事）も見受けた。論文の提出されたのは十篇計りあったが、時間が短いので講演は三人に限られた。トムソンの輻射の構造、エディントン（Sir Arthur Eddington 一八八二—一九四四。一九一三年ケンブリッジ大学教授、翌年同大学天文台長。天体物理学および相対論の研究に従事）の天文学における電離の意義に関する研究が報告された。之によって始めて相対原理と、天体力学とを総合した結果が相一致し、電離的説明を応用する適切なる面白き場合ある事を知った。予も幸いに短時間に水銀換金の講演を為す光栄を荷うた。しかして他の人の論文は taken as read で終結された。天文学總會の事で記すべきことは沢山あるが、餘り専門的に流るる弊害があるから記さぬ。

寄宿舎の内幕を記し度たいが、あいにく学生と接触する暇がなかった。唯外部から窺つて見たに止まる。兎も角夏休み中寄宿舎に残つて勉強している連中だから、熱心家には違いない。餘り喧騒な挙動は気付かなかったが、ほとんど各室に備えてあるピアノの音を聞くことは数々あった。又時々スポーツに行くことも、服装の変りやラケットなど持つて出ることにより判つた。又礼拝堂に日参する学生も少くは無かつた。要するに劍橋ケンブリッジ大学では人物養成を目的としているから、学問一方のみに偏する傾向は少いようである。

寝室に入りて電燈を消せば、ステンド・グラスの窓から朦朧と薄い光がもれて、気味悪い心地が最初はしたが、数日を経れば之に慣れて心地よくなった。隣のトリニティー校のチャペルの塔の時の鐘に夢を覚されて、感慨深き想をしたことも度々あったが、一週日は束の間と思う内に過ぎ去りて、七月二十二日にはこの興味ある大学町を去つた。

（大正十五年（1925）二月「帝大新聞」所載）

- 
- 『随筆』（一九三六年十一月、改造社）所載
  - 旧字は新字改めたが、一部旧字のままとした。
  - 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
  - 理解を助けるために割注を附した。
  - カタカナの地名・人名などは、通行の表記にした。
  - PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub>でタイプセッティングを行い、dvi<sub>ps</sub>dfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。